


 書評

寺尾岳 著

21世紀のリチウム療法

渡邊昌祐

平素からリチウムの基礎・臨床の研究を精力的に進めておられる寺尾教授が「21世紀のリチウム療法」を出版された。最近のリチウム臨床研究のメタ解析の発表論文をわかりやすく解説しながらリチウムの臨床効果を再評価し、まとめた内容である。

取り上げてある項目は、躁病急性期、抗躁効果の予測、うつ病急性期、躁うつ病相の維持と予防、予防効果の予測、自殺の予防、抗うつ薬抵抗性うつ病、コタル症候群を伴ううつ病、統合失調症であり、さらに、二重盲検比較試験による人格障害、知的障害者の問題行動に対するリチウムの評価、さらに、周期性思春期障害に対する間欠的投与方法、または前駆症状期の間欠的投与、ステロイド投与中のうつ状態のリチウム療法の経験が取り上げられている。

気分障害の治療法はまさに日進月歩というべく新しい方法の研究論文が後を絶たないのが現状である。抗精神病薬と抗うつ薬のみを用いていた10年前と異なり、リチウムをはじめ気分安定薬のカテゴリーに当てはまる薬剤が年々登場し臨床応用が増えつつある。非定型抗精神病薬はいずれの薬剤も気分安定薬としての特性を備えているという研究論文や二重盲検比較試験が集積されているので、今後これら薬剤とリチウムの比較試験とメタ解析の成績が得られるので、将来本書が改訂されるごとに加筆して紹介していただければ幸いである。

妊娠中のリチウム療法については、リチウムの催奇率、リチウムの治療計画、産褥期、授乳中の取り扱い、投与量に予測の新しいデータが解説されている。妊娠に際して用いる気分安定薬は、リチウムのほかカルバマゼピン、バルプロ酸があるが、それぞれの特徴があり、長所、欠点を持っているので、その選択順位を心得ておかなければならないであろう。

リチウム副作用に関して著者は甲状腺機能低下のメカニズムを自らの実験から5' mono deiodinase 活性の阻害作用があることを明らかにしている。

リチウムの神経毒性に関しては、その一端として高齢者のせん妄の原因となる危険性が報告されている。Sulman らの報告を引用してリチウムのせん妄誘発作用はバルプロ酸、ベンズトロピンより少ないので、むしろリチウムは神経保護作用の可能性があると報告している。

リチウム療法で最も注意しなければならないのは、リチウム中毒をいかに防ぐかという点にある。ロジスティック回帰分析によると①腎性尿崩症の合併、②50歳以上、③甲状腺機能障害がリチウム中毒の三大危険因子であるとOakleyら(2001)が報告している。しかし、その他、中毒発生の引き金になるのは非ステロイド系消炎鎮痛剤(NSAIDs)の併用によるリチウム中毒報告があると著者は注意を喚起している。

著者らはリチウム薬理作用に幅広く関心を持ち研究を進めておられる中で、リチウム療法の今後の方向性として神経保護作用、神経新生促進作用を新たな適応症の拡大に求めておられるようでその進展を期待したい。生物にとってリチウムはessential trace element かどうかを著者の研究によって教えていただければ評者にとってこの上なく幸せである。

本書はコンパクトにまとめた、リチウムの使い方、注意点、将来性についての明解なる解説書であり、精神科医、研修医、プライマリケア医、精神科臨床に関与するパラメディカルの方々、精神薬理に関心を持っておられる薬理者、生理学者の方々に推薦する次第である。

(河田病院 SRC センター心療内科)

●A5 89頁 2006 定価2,415円(本体2,300円+税) 新興医学出版社